



グレートジャーニーで出会った

多様な人・家族・ コミュニティ



文・写真=探検家
関野 吉晴 vol. 04

▶1999年2~6月 ロシア カムチャツカ地方、
コリヤーク自治管区

【表紙写真】
トナカイとともに暮らすコリヤーク族の子どもたち

遊牧民から学ぶ トナカイ橇の操縦

私は、一度トナカイ橇に乗って
旅をしたいと思っていた。それは
1999年の冬に実現した。

極北シベリアのトナカイ遊牧
民、コリヤーク族のキャンプ地に
着いた。トナカイが集まってくる
と、リーダーのアナトリさんが橇
の扱い方を特訓してくれた。トナ
カイの体は思ったより小さい。西
シベリアではトナカイに乗るが、
そのトナカイの体は大きいとい
う。極北シベリアのトナカイに乗
るのは無理だ。トナカイ橇は思っ
たより操縦性が良かった。1台の
橇を2頭のトナカイが引く。ハー
ネスをたすきがけにして、橇とつ
なげる。首には手綱がかかってい
て、馬と同じように引っ張ったり、
緩めたりして進む方向を指示す
る。慣れてくると微妙なコント
ロールができるようになった。

むちはトナカイ橇独特のもの
だ。細い、150センチほどのしな
やかな枝の先に、セイウチの牙や



極北シベリアの トナカイ遊牧民 とトナカイ橇の旅



アナトリさんたちの住居。家から家へ移動する時は、テントを張る



トナカイ橇を操縦している、コリヤーク族のボリスさん



コリヤーク族の女性はおしゃれで、ビーズなど華やかな装飾のある衣装を身につけている



トナカイ橇の扱い方を習う筆者

トナカイの角で作った三角形の針が付いている。むちを振るって、その針先がトナカイの右足の付け根に当たるようにする。一瞬、ぐーんと、スピードが増す。トナカイの視野は馬と同じように広い。前方に走りながら、後方も見える。いったんむちで右足の付け根を叩くと、次の数回は、むちを振り上げて叩くまねをするだけで、トナカイは奮起して逃げるようにしてスピードアップする。

特訓が終わって、いよいよトナカイ橇の旅が始まった。600頭のトナカイの群れを率いての旅だ。私は1台の橇を任された。急な上り坂では、トナカイの負担を軽くするために橇から降りて歩く。急な下り坂が厄介だ。橇には、太さ1センチほどの丁字状の先をとがらせたブレイキが付いているが、なかなか上手に扱えない。雪が軟らかければ乗り手の足の裏もブレイキに使えるが、硬いところでも速くなり、橇をトナカイの脚にぶつけてしまう。手綱などのひもが緩み、トナカイの脚に絡まる。状況によっては橇から降りて歩くほうが良い。

オホーツク海に出た。海は凍っていた。凍った海の上を走る。海岸と乱水帯の間は比較的平らなので、思い切ってスピードが出せる。凍ったオホーツク海の上をトナカイ橇で走れるとは思っていなかった。このまま、気が高ぶった。このまま方向を変えて走り続けられれば、日本に行ってしまうのではないかなどと妄想しながら走った。実際、ここからバイカル湖やアンカレッジに行くよりも、日本のほうが距離的には近いのだ。

トナカイの赤ちゃんが生まれる春

オホーツク海から再び陸に上がり、ゴールのウスチパレン村に着いた。アナトリさんから、ミキノ村の放牧地に遊びにくるように言われた。「四季を通じて一番好きな季節はいつですか」とみんなに尋ねると、全員が「トナカイの赤ちゃんが生まれる春ですよ。その季節は魚も捕れ、動物たちも動きが活発になり、南に行っていた渡り鳥も帰ってきます。狩りにも最適な季節ですからね」と口をそろえて言う。

トナカイの出産を見た。まず脚2本、それから頭が出てくる。それからは、少し時間がかかる。母トナカイは立ち上がったまま、狭い範囲を動き回る。やがて子トナカイが地面に産み落とされる。子トナカイはすぐには立てない。母トナカイはまだぬれている子をなめる。そのうちに子トナカイは前脚を突っ張って立ち上がろうと



生まれて間もないトナカイの赤ちゃんをなめる母トナカイ

少しづつ伸ばしていく。4〜5時間も経つと、子トナカイは自由に走り回っていた。

厳しい生活環境下 手を差し伸べ合つて ともに生き抜く

冬営地を移動する直前、50キロ離れたウスチパレン村から女性が二人やってきた。海岸部では、今

年は寒さのために魚もアザラシも捕れない。トナカイの肉が欲しくて、ここまで雪道を歩いてきたと言う。

放牧地では、早速トナカイを殺すことになった。今回は銃で射止めた。投げ縄を使うとトナカイが動き回り、子トナカイが踏み付けられる恐れがあるからだ。トナカイを解体すると、半分は自分たちの分、残り半分を女性たちに譲った放牧地のリーダーであるアナトリさんは「いつも助け合つて暮らしているのですよ。彼らがたくさんのアザラシを捕った時は、私たちが譲ってもらおうのです」と言う。

アナトリさんたちの夢はトナカイを増やすことだ。しかし、オオカミが増えるとトナカイは増えない。トナカイ遊牧民たちはトナカイを飼うだけでなく、オオカミ狩りをし、魚を捕る。主なたんぱく源を狩猟や漁労で調達することによって、トナカイは食べないようになっているが、野生の肉や魚が手に入らない時は、トナカイを殺さなければならぬ。本当はトナカ

苦しい環境のなかで人々は協力し、自然とも調和を取り、超自然的世界に対しては、畏れ、祈りながら、到底生きていけないように見える土地でしっかりと生きていた。

Yoshiharu Sekino

1949年東京生まれ。一橋大学在学中に同大探検部を創設し、アマゾン全域踏査隊長としてアマゾン川全域を下る。1993年から、アフリカに誕生した人類がユーラシア大陸を通過してアメリカ大陸にまで拡散していった約5万3千kmの行程を廻行する旅「グレートジャーニー」を開始。南米最先端ナバリノ島を出発し、10年の歳月をかけて、2002年2月10日タンザニア・ラエトリにゴールした。「新グレートジャーニー 日本列島にやって来た人々」は2004年7月にロシア・アムール川上流を出発し、「北方ルート」「南方ルート」を終え、「海のルート」は2011年6月13日に石垣島にゴールした。